

第2回 「卑弥呼誕生と高天原」

①高天原の女王・天照大御神の誕生の地・阿波岐原はどこか

前回講義の議論で、奴国と神話のつながりはあるように思える。古事記や日本書紀では、天照大御神は、伊邪那岐の三貴子として、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で誕生したになっている。

はたして、「筑紫の日向の橘の小戸の櫛原」（日本書紀、古事記は「笠紫の日向の小門の橘の阿波岐原」橘と小戸が入れ替わっている）神話の元になったところはどこだろうか？ 戦前は多くの人が議論しているが、最近はまだ試みられることはないようである。あえて、その見解を検証してみたい。

◆河村哲夫氏の見解（「九州を制覇した大王 景行天皇巡幸記」からの要約）

筑紫といえば現在では九州全体を指すこともあるが、もともとは、筑紫野市にある筑紫神社に象徴されるように、那珂川と御笠川の上流域一帯をさしていた。したがって、この地域で橘、小戸、阿波岐原を探すべきとする。日向も日向の国ではなく、日に向かうという意味と解釈する。この地には立花山もあり、「櫛」は櫛の木であり、香椎宮の名前のもとであろう。「小門、小戸といえば、小さな出入口、すなわち小さな港というような意味であろう。香椎宮の西側に海岸があり、古い時代には香椎の浦とよばれた。そこにある鳥居の前面400mのところに御島とよばれる岩礁があり、御島大明神が祀られている。『日本書紀』によれば、朝鮮出兵の吉凶を占うため、香椎宮に滞在していた神功皇后が海で髪すずぎの占いを

おこなったが、貝原益軒は『この地こそ、すなわち神功皇后が髪をすずがれた所である』（筑前国続風土記）と断言している。黄泉の国から逃げ帰ったイザナギノミコトもまたみそぎ祓いをおこなった。（略）神功皇后（略）の儀式は、イザナギノミコトのみそぎ祓いにあやかっただけのこと、御島においてみそぎ祓いをおこなう風習があったと考えるのは考え過ぎであろうか」との趣旨を述べている。このほか、宮崎の比定地（宮崎市内の数カ所？）も有力候補地とし、その理由として「北部九州の博多湾岸とおなじく、何ゆえこの日向の地に那珂郡があり、住吉神社が祀られたのであろうか。それはやはり、天孫族の日向南遷と関係があるとみるべきであろう」としている。しかし、この地に阿波岐原があるのは、日向王朝の南遷にともなうものとする。

◆藤島正之氏の見解

「笠紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」とは、そのものずばり今日の那珂川の河口を12.3キロさかのぼり、那珂川が始



筑紫神社

小戸 立花 阿波岐
原の候補地の地図



めて山峡に入る処がその地である。この地は東の台地が安徳台で海拔50mから60mに及ぶ平坦な、22.3ha以上の広さをもつ人工の台地である。この地が筑紫の国の都の在る処である。西側の丘陵は那珂川町大字西隈の地であり、小字名は立花木（たちばなぎ）である。中間を流れる川是那珂川であり、この谷は古来、岩戸河内（いわどこうち）と呼ばれた一帯の一部である。安徳台の西南に在る山田地区の国道385号線ぞいの地、那珂川の南の地が萩原（おぎわら）の地である。山田地区の人達は萩原とかいて之を「おぎわら」と呼んでいる。阿波岐原とおぎわらは同一地ではないか。

安徳台はその当時筑紫の国の都があり（倭人伝では奴国の都）、伊邪那岐・伊邪那美の御殿即ち八尋殿（大きな御殿の意）も安徳台上に在ったものと想定される。安徳台の西端はなかば那珂川の流れにつつまれるようになっていいるが、その台地の西端は古墳であると言われている。この古墳の発掘研究はいまだ行なわれてはいない。

伊邪那美命の亡くなった処も筑紫の国、禊をされた処も筑紫の国の川で行なわれたと読むべきであろう。神々の出生の地是那珂川中流の安徳台一帯の地であろう。

◆安本美典氏の見解

大まかに要約するなら「宮崎県のシーガイアのあるあたりの江田神社や小戸の地名のあるあたり（大淀川付近）を第一候補に、その次に福岡と鹿児島」をあげている。上記2人が筑紫の範囲を想定、藤島氏が奴国と直接結び付けて発言しているのに対し、宮崎を有力とし、奴国とのかかわりにはふれていない。それより、伊邪那岐を九州勢力の代表、伊邪那美を出雲勢力の代表ととらえ、政略結婚の破綻した後のできごとを神話化したとの見解を示している。

<まとめ>

このほかイザナギの禊の地「筑紫の日向の橘の小戸の憶原」について各氏の見解を再度まとめると、①宮崎市塩路の「住吉神社」付近（宮崎市のシーガイア近く）②福岡市の「住吉神社」付近③鹿児島県の「住吉神社」付近（宮崎県との県境＝児湯）④福岡市西区の今宿青木地区（原田大六氏）⑤福岡市の生の松原付近（佐藤寿哉氏「わかりやすい『古事記入門』」）⑥小戸は出雲と北九州の間の門司あたり（挾間畏三氏ら）⑦安徳台近くの那珂川（藤島正之氏）一などの説がある。

【私の見解】

イザナギ・イザナミの国生み神話の核は、中国の江南等からの渡来人が、日本列島に移り住む時の状況を織り込んでたものであろう。したがって、たどりついた渡来人やその子孫が多くを国をつくった。漢書には分かれて百余国あったと記されているが、もっともっと多くのクニがあったのだろう。魏志倭人伝では30カ国に減っている。後漢書でも「もと百余国あったが、いま使節を通じるところ30カ国」と記している。倭国大乱などで国が統合されたのであろう。この中には斜陽を向かえた奴国も後に大和朝廷となる邪馬台国もある。日本最初の「クニ」らしい「クニ」として奴国が、勢力を示したのが金印をもらった紀元57年以降百年近くのことだろう。その時代のどこかで奴国の王族は出雲と手を結び、出雲との蜜月時代を迎えたのかもしれない。しかし、出雲との政略結婚もなんらかの原因で破綻したのだろう。この破綻が、「イザナギ・イザナミの死別（事^{こと}戸^との言い渡し）神話の核」であろう。西暦180年までには、倭国内の互いの攻伐で奴国王家は滅び、卑弥呼の支配下にあった。

さらに日本神話を信じるなら、邪馬台国が生まれるきっかけとして、出雲と決別した王族（イザナギ）が、奴国に帰ろうとしたが、果たせずまだ未開の地であった「日向」にたどりつき、同じ「奴国」と称し（倭人伝の30カ国の中に奴国が2回出る）再起を図った可能性がある。その子孫が三貴子のアマテラスであり、スサノウ、ツクヨミではなかろうか。その地をどことするか、宮崎県的那珂郡と宮崎郡（現宮崎市）あたりを想定してよいであろう。

彼らが独立または国々が互いに手を結び、または反発し、それぞれの国を形成していった。アマテラスは筑後平野に、スサノウは熊本県北部（菊池市など）に落ち着いたのかもしれない。そして、アマテラスはかつての宗主国・奴国と戦うことに、狗奴国になったスサノウは邪馬台国と戦い、破れ、新羅を経て出雲に天降り、出雲の支配者となる。残ったグループは、熊襲として大和政権に組み込まれていったと考えてはどうであろうか。ツクヨミについては神話はその後

8月に花火大会があった御島神社（満潮の時には鳥居しか見えない小さな島）は、神宮皇后が髪を海につけて“新羅遠征をすべきなら、髪は分かれて二つになれ！”と占ったところ。髪が自然に二つに分かれたので、ミズラ（男装）に結い、浜辺（片男佐海岸）に渡って来られた。

その時頭だけ男装の姿だったので半分男という意味で“片男佐”と名付けられたと

香椎宮近くの御島

いわれている。同じように、鎧をつけて歩いてたところを“よろい坂”、かぶとを着けたところはか“ぶと塚”と呼ばれ石碑が建っている。こうして男装に身を固め、仲哀天皇の身代わりができあがり、海浜を男姿で威風堂々と歩いたので、“浜男”と呼ばれるようになった。現在は浜男通りという地名が残っている。（わが町“香椎”歴史散歩 しのざき歯科医院=<http://www.geocities.jp/dentopia21/frekisi.html>から）



を何も語っていない。

住吉神社は宮崎のほうが古く、神功皇后のとき今の博多の住吉神社に勧請され、さらに各地につくられたものと考えたい。

②高天原＝邪馬台国（卑弥呼＝天照大御神）とする説

邪馬台国をめぐる議論は江戸時代から盛んになり、7つの流派があるように見えるという。安本美典氏は「江戸の邪馬台国」いう著書の中で①古道「日本書紀」の流れ②新井白石の流れ③和辻哲郎・栗山周一の流れ④本居宣長の流れ⑤鶴峰^{しげのぶ}戊申・近藤芳樹の流れ⑥片山蟠桃の流れ⑦藤原貞幹の流れがあるとする。

これは今日の学者や研究者の議論をよく見ると、この7つの流れの中にあるように見える。今回は③の「和辻哲郎・栗山周一の流れ＝卑弥呼は天照大御神である」という考え方を中心に考えることとする。（以下の3氏の写真はいずれも「研究史・邪馬台国の東遷」から）

◆最初に卑弥呼＝天照大神説を唱えたのは白鳥庫吉氏（1865～1942、東京大学東洋史学）



畿内大和説を主張する京都大学の内藤湖南氏との論争で有名。主張の核心は、明治四十三年（一九一〇）に発表した論文「倭女王卑弥呼考」の中で「皇祖発祥の地である九州において、上古、卑弥呼をはじめとして、女子で君長であったものが多数いたとすれば、天照大御神が女王として天上に照覧するのも、また、なんの怪しむべきことがあろうか。（略）倭女王卑弥呼は狗奴国男王の無体を怒って、長くこれと争ったが、その暴力に堪えず、ついに戦中に死んだ。（略）神話が太古の事実を伝えたものとすれば、神典の中に記された天の安の河の物語は、卑弥呼時代におけるような社会状態の反映とみることができようか。」

（安本美典著「研究史邪馬台国の東遷」から。安本氏が文語体を口語体になおす）。高天原の場所については、「邪馬台国＝北九州筑後山門郡説」をとる。

◆和辻哲郎氏（1889～1960、東京大学哲学者）の説



白鳥庫吉氏の説を引き継ぐ。大正9年（1920）に初版の『日本古代文化』に明確に東遷説を述べているが、その後の改訂版（大正14年、昭和14年、同26年新版）では、時代的背景をおもんぱかってか、天皇家の祖先を女酋とすることを避け、明確な東遷説を述べなくなっている。

「女王国が、九州西北部に限られていたことは、魏志の参問した倭地が周旋五千余里というのを見て、あきらかである。朝鮮海峡を三千余里とみる見当から行けば、周旋五千余里は、筑肥の全部を含むに足りない。（初版）」「記紀の材料となった古い記録は、たとえ、官府の製作であったとしても、ただ少数の作者の頭脳から出たものではない。弥生式文化の時代からの、古い伝承に加えて、三、四世紀における第二次の国家統一や、五世紀における国民の発達の際に、自然に生まれでた古い伝説が、六世紀を通じての無数の人々の想像力により、この時代の集団心に導かれつつ、漸次形をなして行ったのである。奈良朝に至って、最後に編集されるさいに、とくに明白な官撰的な色彩を帯びさせられたとしても、それは、物語の中核をまで変え

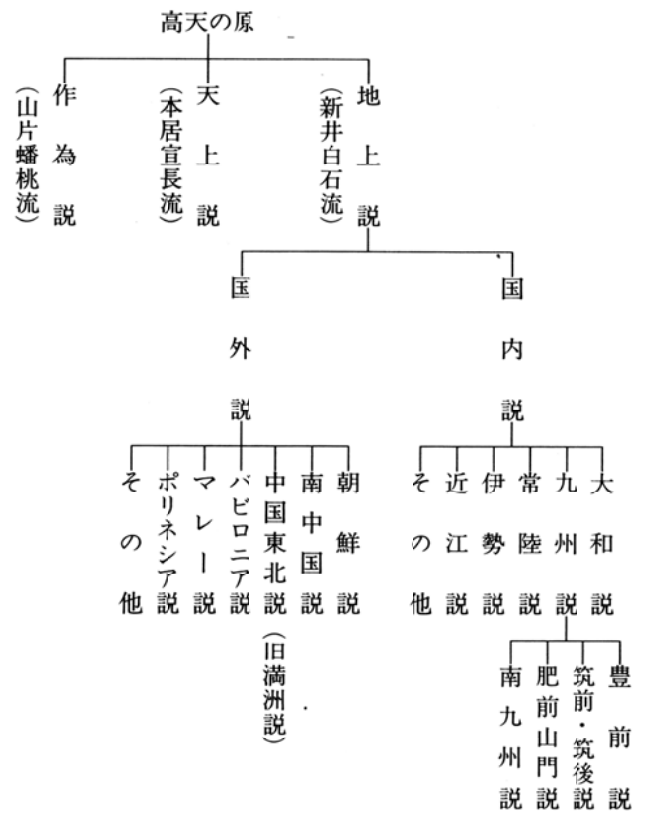


図9 「高天の原」についての諸説

「君主の性質については、記紀の伝説は、完全に魏人の記述と一致する。たとえば、天照大御神は、高天の原において、みずから神に祈った。天上の君主が、神を祈る地位にあつて、万神を統治するありさまは、あたかも、地上の倭女王が、神につかえる地位にあつて人民を統治するありさまのごとくである。また天照大御神の岩戸隠れのさいには天地暗黒となり、万神の声さばえのごとく鳴りさやいだ。倭女王が没した後にも国内は大乱となった。天照大御神が岩戸

和辻哲郎氏の古代観エッセンス

「さらにまた、神代史の諸

史邪馬台国の東遷」から）

より出ると、天下はもとの平和に帰った。倭王壹（台与）の出現も、また国内の大乱をしずめた。天の安河原においては八百万神が集合して、大御神の出現のために努力し、大御神を怒らせたスサノオの放

代におけるが如き社会状態」を反映

伝説が、筑紫を背景とするという見解も、ここには暗示深いものとして役立つであろう。潮満瓊潮満瓊の伝説が九州西海岸の潮の干満と関係し、天照大御神の天の安河原の諸伝説が、（白鳥庫吉氏の述べるように）『卑弥呼時

ていない。」(改稿版)

「記紀の伝説が、じつは、魏志の伝える筑紫人の生活を背景として産まれたものにすぎない…」(初版)。また、考古学的な事実が一致することにもふれ、「山陰を大陸への門戸とする近畿中心の銅鐸の文化と、筑紫を門戸とする筑紫中心の銅鉾銅剣の文化との対峙を示すことをみた。」と述べている。

この「銅鉾銅剣文化圏対銅鐸文化圏」論は、戦後長く支持さ、昭和59年(1984)の島根県の荒神谷の銅剣358本の発見、平成8年(1996)の同加茂岩倉での39個の銅鐸発見までは、教科書的な説として広く行きわたっていた。

ここで注目されるのは、近畿対九州の構図の中に、山陰という言葉が挟みこまれていることで、どこまで出雲を意識していたかどうかは不明だが、記紀の国譲りをやはり強く認識していたと思う。

また、「邪馬台」と「大和」は同じ語源とし「日本を『倭』すなわち邪馬台と呼ぶのは、魏の時代においては、主として筑紫をのみ意味してのことであった。

(略)国家統一前に始まった名称であるらしい。(略)もし邪馬台の勢力を征服した他の勢力が、国家統治の位置にあったとすれば、その朝廷は(略)ヤマトと呼ばれることを黙過するはずがない。」と邪馬台国の東遷を明示している。

◆栗山周一氏(1892~1941)の説



邪馬台国と記紀神話を結びつける時、天皇の在位期間に注目して、初めて神話に年代論を持ち込んだ人物で、安本氏は、自らの邪馬台国論ときわめて共通性の多

い史観を持つ歴史家がいたことを知らなかった。それを朝日新聞の読書欄の「忘れられない本」と題する投稿記事できっかけをつかみ、栗山氏の業績を再び世に知られるようにしたといえる。

その本は「少年国史以前のお話」(昭和7年、同13年刊)で青少年向けに書かれたものだった。日本の神話時代について本格的に書かれたものとして、「日本欠史時代の研究」(昭和8年刊)がある。

安本氏が天皇一代十年とするのに対し、栗山氏は「一帝在位平均は12年~14年で、平均13年」とする点だ。コラムにもあるように安本氏の見解ときわめて近いといえる。

具体的な場所については、記していないが、「各各の国の間隔や広さなどは、現今の郡面積でいどあるから、たとえ三十ヵ国としても、北九州に求むべく十分である」とし、まとめでも「神武天皇の東征の神話のごときも、この辺りの消息を、よく物語っているものであろう」と結論づけている。

言論統制の厳しかったこの時代に皇室の祖先を魏志倭人伝に登場する女酋・卑弥呼(当時は神典とされ、本居宣長は卑弥呼を女酋ととなえた)に求めることなど考えられないことだったと、思われる。勇気ある執筆であったに違いないだろう。

◆このほかの卑弥呼=天照大御神説

◎林屋友次郎氏(1886~1953)=東京鋼材(のちの三菱鋼材)社長で、駒沢大教授を務めた仏教学者。「天皇制の歴史的根拠上巻」(昭和21年刊)、後に「日本古代国家論」(同47年刊)→「卑弥呼は天照大御神。九州からの東遷」を明確に述べる。

◎飯島忠夫氏(1875~1954)=学習院大教授。「日本上古史論」(昭和22年刊)→「神武天皇の大和平定を西暦1911年以降とし、天照大御神の時代は卑弥呼の時代。里程論からも、邪馬台国は筑紫。天孫降臨は、狗奴国の背面を衝く作戦。鬼道は神道である」

◎さらに和田清氏、市村其三郎氏、鯨清氏らが卑弥呼=天照大御神説をとっている。まだまだいるのではないかと考えている。

「神話伝説は、もとより歴史ではない。けれども、神話の中には、なにかの伝説などにヒントを得たものもないとは限らぬ。そして、卑弥呼の伝説が神代の事跡として考えると、天照大御神の神話がある。天照大御神は、女神であり、統治者であり、女王であり、君主であるから、天照大御神神話は、倭国卑弥呼の事実を伝えたものではないか。卑弥呼は、年已に長じても夫婦なく云々とあるが、女神たる天照大御神にも夫婦なる神がない。男弟ありて治国を助くとあるのは、素戔鳴の尊または月読の命の男弟の所伝とみれば、正しく一致するではないか。そして、天下を統治し、女王であったから、立派な宮殿にもすみ、侍女をたくさんはべらしていた。

卑弥呼をヒミコとよむべきか、ヒメコとよむべきかは明らかでないが、支那文字をもって日本の音を表わしたものである。天照大御神は、日の御

子と伝え、『オホヒルメムチノミコト』という。

ヒルメノミコトすなわち姫尊である。ヒメコ、ヒミコと音通ではないか。卑弥呼に、日の御子、姫御子(姫尊)、または日の巫女の意があるとするれば、正しく日本の神話にでてくる神々の名と思われる。

卑弥呼は、よく鬼道に通ずというが、未開時代においては、大衆をおさめ支配するに魔術が、ぜひ必要であった。現今でも、野蛮人においては、魔術師が、一番尊ばれるのである。そこで、鬼道とか巫道とか、またはふしぎな霊を祭るのである。神を祭り、神のお告げを聞くという原始的な宗教である。

以上のような考えから、卑弥呼は、天照大御神の事跡を伝えたものではなからうか。年代的に、卑弥呼女王を神話として伝えていたことが首肯される。」(「少年国史以前のお話」=安本美典著「研究史邪馬台国の東遷」から)

栗山周一氏の主張

③安本美典氏の古代天皇一代十年説

◆安本氏の年代論の核心

「『古事記』『日本書紀』は、神武天皇の五代まえが、天照大御神であったと記している。

一代平均十年として、神武天皇の時代、二七〇～三〇〇年から、五代五十年さかのぼれば、天照大御神の時代は、二二〇～二五〇年ごろとなる。卑弥呼の時代とまさに重なりあう。私たちは、年代論的に無理なく卑弥呼に比定しうる女性を、『古事記』『日本書紀』の神代の記述のなかにみいだしうるのである。

さて、横軸に、天皇の「代」をとる。縦軸にその天皇の即位した年をとる。そして、今上天皇までについてプロットし、グラフを描いてみる。すると、図のようになる。

このグラフをみれば、「四七八年の雄略天皇(=倭王武)の宋への遣使」、「四二五年の応神天皇(=倭王讃)の宋への遣使」(安本美典著「倭の五王の謎」講談社現代新書参照)、「崇神天皇を三六〇年ごろの人とする説」、「神武天皇を西暦二八〇～三〇〇年ごろの人とみる考え、『卑弥呼=天照大御神説』などが、史的事実である実線の延長線上にきわめて自然にのっていることを、一見して、読みとることができる。」

④地名の一致の指摘

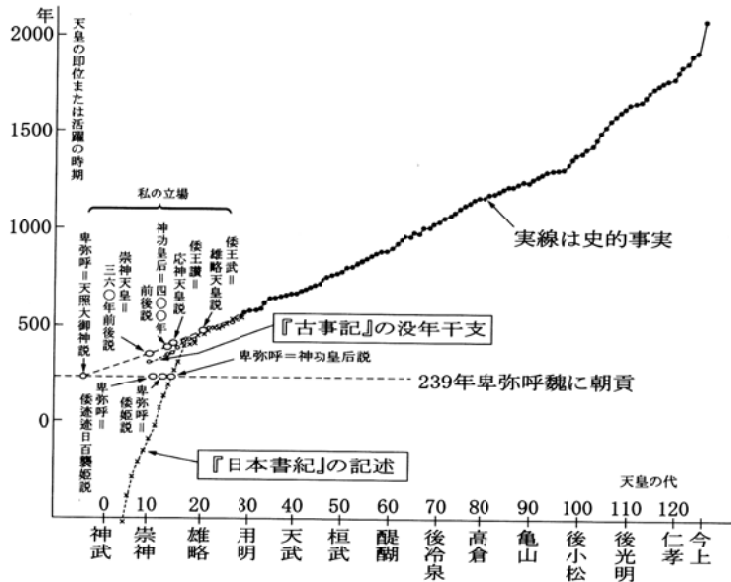
安本氏が自ら語るように、安本史観は一つの仮説であると思う。しかし、この説以上に古代の日本を説明できる説がほかにあるのかと思っている。説明できない時、新たに仮説を重ねるような説がある。例えば、かつての三角縁神獣鏡の「伝世説」である。今は弥生時代を早めることで説明できるとするようになった。

だが、これもまた仮説だ。土器の編年に矛盾が出てきている。そこに仮説をつくらねばならない。できるだけ単純な仮説こそ、真実にたどりつけるのではなかろうか。安本史観は記紀を信じ、歴史の核を見つけ、魏志倭人伝などの中国正史や、考古学的事実と重ねあわすという一つの原理で成り立っている。

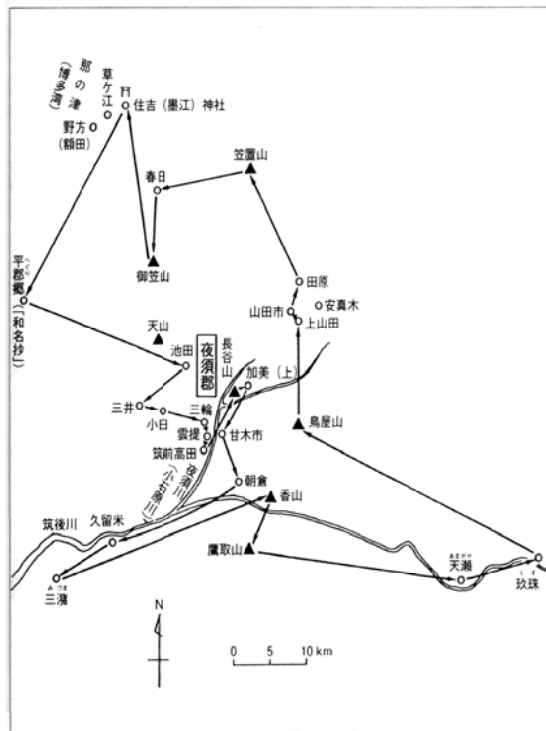
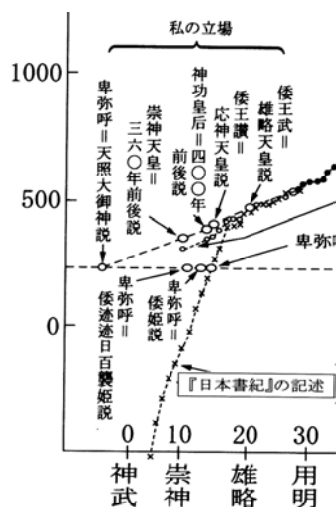
その中で朝倉地方と大和地方の地名の一致は圧巻ともいえる事実だと思う。

◆朝倉市を中心とする地域に邪馬台国(高天原)があった

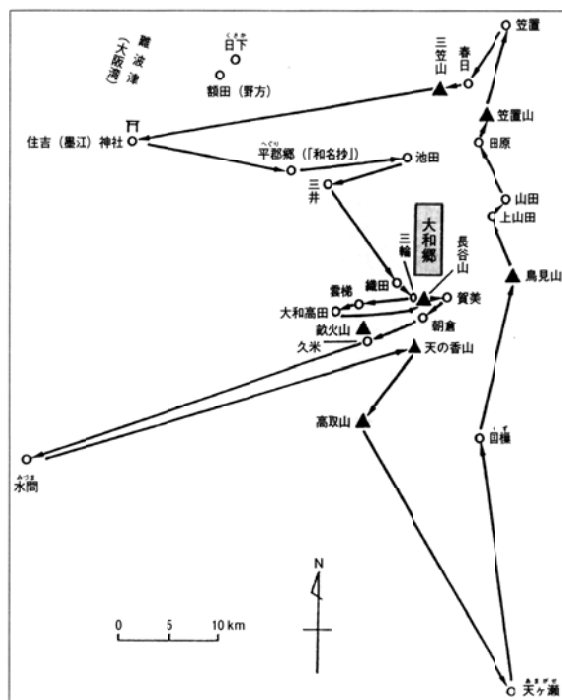
大和と地名の一致を一つの根拠として、平成16年刊の「邪馬台国と高天原の原伝承」でも、右の図を上げている。有名なのですでにどこかでご覧になっておられると思う。同著で「それは、夜須町のまわりと、大和のまわりとに、つぎのようなおどろくほどの地名の



安本美典著「倭王卑弥呼と天照大御神伝承 神話のなかに、史実の核がある」掲載の諸説一覧図 (p217)



(2) 夜須町のまわりの地名



(1) 大和郷のまわりの地名

地図12 北九州の地名と大和の地名とのふしぎな一致

推理・邪馬台国と日本神話の謎シリーズ「邪馬台国と高天原の原伝承」(p164,165)の夜須町のまわりの地名(左)と大和郷のまわりの地名

一致をあげている(同書から)。

■北九州 (北の笠置山からはじまって、時計の針の方向と逆に一周すれば)笠置山→春日→御笠山→住吉(墨江)神社→平郡→池田→三井→小田→三輪→雲堤→筑前高田→長谷山→加美(上)→朝倉→久留米→三潞→香山(高山)→鷹取山→天瀬→玖珠→鳥屋山→上山田→山田市→田原→笠置山。

■畿内 (北の笠置〔笠置山〕からはじまって、同じく時計の針の方向と逆に一周すれば)笠置(笠置山)→春日→三笠山→住吉(墨江)神社→平郡→池田→三井→織田→三輪→雲梯→大和高田→長谷山→賀美(上)→朝倉→久米→水間→天の香山(高山)→高取山→天ヶ瀬→国樺→鳥見山→上山田→山田→田原→笠置山。

どちらにも、北方に、笠置山が存在する。三笠山、あるいは御笠山が存在する。住吉(墨江)神社が存在する。西南方に、三潞、あるいは水間が存在し、南方から東南方にかけて、鷹取山(高取山)、天瀬(天ヶ瀬)、玖珠(国樺)が存在する。

これら二十四個の地名は、発音がほとんど一致している。二十四個の地の相対的位置も、だいたいおなじである。おどろくほどの一致といってよいであろう。

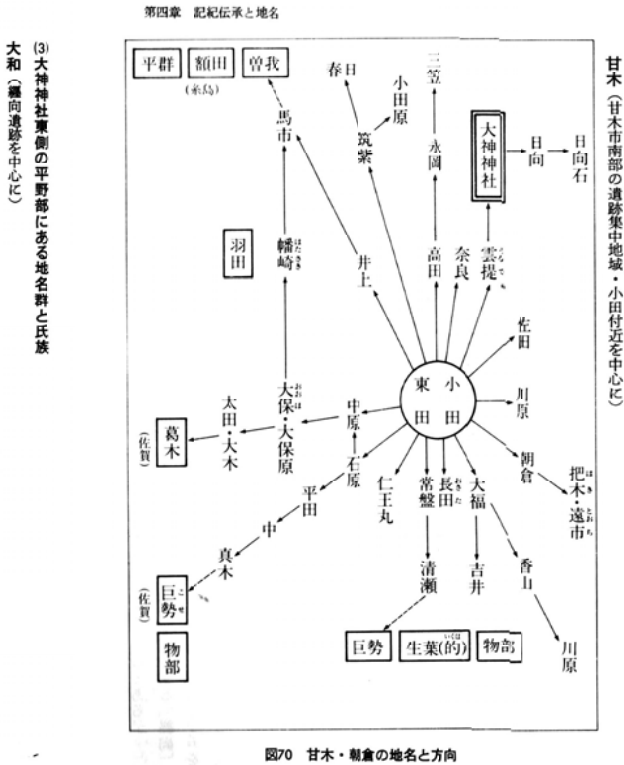
住吉神社の近くには、草ヶ江(日下)、野方(額田)などの類似地名が存在する。相対的な位置を無視すれば、以上のほかに、奈良、出雲、八幡、芦屋、大津、怡土(または伊都)、那珂(または名賀、那賀)、曾我(蘇我)、広瀬などの地名が、九州と関西の双方にある。また朝倉あたりに類似地名が集中している。」

この地名の一致については奥野正男氏は「考古学からみた邪馬台国の東遷」の中で「私は、安本説を基本に、さらに大和盆地東南部と鳥栖・甘木を中心とした筑後川北岸部の地名を比較検討したところ、五万分の一地図に表記されている地名のみで、約八十カ所の地名が一致または類似しているということがわかった。この場合、小字のごく一部も対象としているが、一枚の五万分の一地図内で、遠隔の二つの地域にこれほど地名が一致する例は、いまのところどこにも見出せない。」と述べている。さらに「弥生後期～古墳前期の遺跡が集中する『纏向』と『小田』付近を中心にした地名とおおよその位置を示した。一部に現在の地図にない古い地名を『和名抄』などから補っているが、ここにあげたものは同じ表記・発音の地名のごく一部である。大和で、纏向を中心に、その四方に展開する地名群と、これをかこむように見出される大和政権直属の豪族の拠地は、ほとんど一部の位置を変えるだけで甘木・朝倉地方に見出すことができるのである。」と、上のような図を示している。

奥野氏は「邪馬台国はここだ」で論理的な検証から、筑後川北岸説を提案しており、朝倉市周辺および佐賀平野をも視野に入れ、吉野ヶ里遺跡もその候補地とし、前原市の平原遺跡を卑弥呼の墓である可能性も示唆している。

◆九州と近畿の似た地名

地名学者・鏡味完二氏は「日本の地名」(1964年刊)の中で表のように九州と近畿で地名が一致「地名の名づけかたが、じつによく一致している」とのべ、位置や地形まで一致していることを指摘している。



	九	州	近	畿
1	旧 名	現 名	旧 名	現 名
2	山 門	山門郡	耶摩止	大 和
3	志 賀	志賀島	滋 賀	滋賀郡
4	耳 納	耳納山	三野	美 濃
5	日 田	日 田	飛 驒	飛 驒
6	基 肆	三養基郡	紀 伊	紀 伊
7	志 摩	糸島郡	志 摩	志 摩
8	怡 土	怡土村	伊 蘇	伊 勢
9	儼	博 多	灘	灘地方
10	吾 田	阿多(薩摩)	阿 太 安 太	大阿太村(大和) 有田(紀 伊)
11	伊 鈴	五十鈴川	五十鈴川	五十鈴川

◆民団移動は地名の移動を伴う

現代でも似た事例はある。戦前、岡山県の水島工業地帯に三菱重工業が進出したとき、名古屋の地名を持ち込んだ事実がある。なんと、その時の厚生関係者の母校が小樽で、新婚の地が函館だったことから、小樽や函館の地名もつけられていた。（コラム参照）

⑤考古学的事実からの挑戦

◆墓制

北部九州では特異な墓制として甕棺墓がある。これについて、「奴国の滅亡」（安本美典著）で、九州の考古学者の意見を引用している。

「甕棺墓葬の伝統が(弥生時代の)後期前半を境に急速に消滅し、箱式石棺墓・石蓋土墳墓と交替していく。」(高倉洋彰氏)「(弥生)後期中頃になると土器棺である甕棺墓が姿を消し、箱式石棺や土墳墓に後漢鏡が副葬されるようになり……。」(柳田康雄氏)「甕棺墓地の形成時に比べ、その終焉はきわめて唐突な感がある。弥生時代の後期初頭に甕棺墓は激減し、

出土した遺物	甕棺	箱式石棺
	(金印奴国時代)	(邪馬台国時代)
細形銅利器(銅剣・銅矛・銅戈)	75本	0本
「清白」「精白」「青白」「日光」「日有喜」銘鏡	30面	0面
小型仿製鏡第Ⅱ型	0面	35面
「長宜子孫」銘内向花紋鏡	0面	18面

前半にはほとんど消滅してしまう。佐賀平野を含めた外縁地域では、甕棺墓と同一墓域内で土墳墓・石蓋土墳墓に引き継がれる状況もあるが、福岡平野および近隣地域では墓そのものが激減する傾向がある。元来保守的な墓制が変化し、さらに墓そのものの激減する現象の背景には、大きな社会変動が考えられる。その要因は甕棺墓の最盛期である中期後半の社会状況のなかに潜んでいる。奴国内部でも、それまで甕棺墓の副葬品であった青銅武器が一括して埋納されるなど、祭祀形態も変化している。このような北部九州内外の新しい状況の中で甕棺墓はその権威性を失い、終焉を迎えたものと考えられる。」(浜石哲也氏)。

この甕棺墓からの箱式石棺墓への変化こそが奴国の時代から邪馬台国へ移っていくものであることを指摘している。

◆鏡について

《邪馬台国時代の鏡—小型仿製鏡第Ⅱ型—の分布》

小型仿製鏡第Ⅱ型の鏡は、甕棺からは全く出土せず、箱式石棺から多数出土することから、邪馬台国時代の鏡であるとされる。小型仿製鏡第Ⅱ型の鏡は、博多湾岸からはほとんど

倉敷市水島地区の町名は北海道と関係あり？ 水島コンビナートの「発祥の地」ともいえる三菱重工水島航空機製作所(三菱自工水島の前身)の旧社宅街の町名由来説に、新説が加わってきた。従来は「名古屋市の町名にちなんだもの」が定説だったが、同製作所関係者の遺族の指摘で、明らかに

現代にもある地名の移動

同製作所は昭和十六年秋に建設。三菱重工の名古屋航空機製作所から多数の関係者が移住して、四千戸以上の社宅からなる「三菱むら」をつくった。現在、水島商店街や市水島支所などがある市街地中心部がその地区。社宅はほとんどなくなり、今は一般の市街地になっている。

町名は初代所長の莊田泰蔵氏(故人)が名古屋市の町名を別表のように付けたと伝えられてきた。「ほとんどの町名が名古屋市に現存、あるいはかつてあった」(同市住居表示課)もので、名古屋説は既に裏付けられている。

この説に、新たな一石を投じているのが岡山市津島福居、主婦友野倭文子(しずこ)さん(61)。小学生だった友野さんは父・伊藤運炳氏(故人)＝当時同製作所の厚生部門役員＝の転勤で来倉。運

炳氏は莊田所長に町名案を依頼され「函館市と小樽市の地名を進言した」という。

函館市史編さん室によると同市には、水島に通じる地名が多数。「東川町、弥生町、栄町は現存。戦前のころは相生町、春日町、幸町、常盤町、高砂町、寿町もあった」と同室。函館は運炳氏の新婚の地、小樽は

母校(小樽高商)のあった地。友野さんの記憶によると、青葉町の由来は函館市に現存する青柳町で、当時水島にはまだ柳がなかったので「葉」にした、という。またこれまでの説では分らなかった東川町の出所も、これで裏付けられる。緑町は小樽高商のあった地名。(1992年4月6日付け、山陽新聞から)

水島	名古屋	函館	小樽
相生	◎	○	◎
東川		◎	
緑町	◎		◎
寿町	◎	○	
瑞穂町	◎		
春日町	○	○	
弥生	◎	◎	
幸町	○	○	◎
栄町	◎	◎	
青葉町		(青柳町)	
常盤町	○	○	
高砂町	○	○	
千鳥町	○		

◎は現存、○はかつてあった地名

桓(帝)・霊(帝)の間(146~189年)の倭国大乱のあとに、墓制が変わったように見える

お墓の種類	行われた地域	おおまかな年代	時代
甕棺	北九州	西暦 0 ~ 180年	奴国の時代
箱式石棺	北九州	西暦 180 ~ 300年	邪馬台国の時代
竪穴式石室	畿内	西暦 300 ~ 400年	古墳時代
横穴式石室	畿内	西暦 400 ~ 600年	古墳時代



小型仿製鏡第Ⅱ型の鏡(左)と小型仿製鏡第Ⅱ型の分布(右)
(表と図は<http://yamatai.cside.com/katudou/kiroku196.htm>から)

ど出土せず、朝倉盆地から筑紫平野にかけての筑後川流域の地域から多く出土する。邪馬台国の勢力が、筑後川流域の地域にあったことをうかがわせる。

《2種類あった邪馬台国時代の鏡＝仿製鏡》

邪馬台国時代の輸入の魏鏡の形式には後漢鏡から省略化や、内行花文鏡の鈕座が蝙蝠形に変化、あるいは「長宜子孫」銘内行花文鏡が登場する。これらの中に卑弥呼の鏡があるのだろう。平原遺跡出土の方格規矩鏡は、国内産であるとの説（柳田康雄氏主張）が強くされており、同時代に中国鏡に負けないような高度の技術で国内でつくられた鏡と、一段身分の低い人たちが使う鏡（小型仿製鏡第Ⅱ型＝技術的には低い）があったのではなかろうか。

前頁下左の画像は小型仿製鏡第Ⅱ型で、「王」クラスの墓に入れるもの（上の図左＝平原遺跡出土鏡など）とは役割が異なり、小型仿製鏡には実用的な面があったのかもしれない。

◆鉄器

邪馬台国時代の倭人は鉄鏃を使った。魏志倭人伝には、「兵器には、矛・盾・木弓を使い、矢は鉄鏃、あるいは骨鏃」と記されている。邪馬台国時代の畿内からは、弥生時代の鉄鏃は269個しか出土していないのに、九州からは1168個見つっている（表＝川越哲志編「弥生時代鉄器総覧」から）

⑥庄内式土器をめぐる諸問題

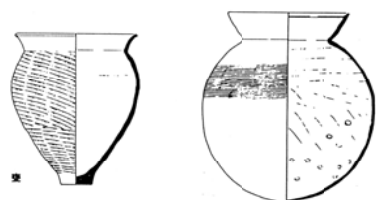


図1 弥生後期の土器（左）と古墳前期の土器（右）



図2 大和型（左）と河内型（右）

上は左が弥生式土器、そこが平らになっている。右はそこが丸くなっている土師器（布留式）。下は大和型（左）と河内型の庄内甕（季刊邪馬台国43号から＝1990年秋号から）

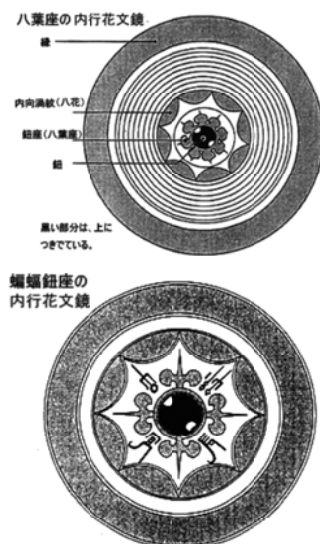
庄内式の甕の特色は内側をへらで削りかなり薄く、煮炊きの効率が上がっている。しかし、表面は弥生式土器の特色であるたたき目を残し、土師器（布留式）のように丸くなりきいていない（図参照）。その後、纏向遺跡の発掘で庄内式土器に二種類あり、大和型と河内型あり、両地区かあるいはその影響下で生産されたことが判明した。最近、胎土の分析から播磨発生説も登場するなど、まだまだ謎の部分が多い。

◆庄内式の起源は九州？

ジャーナリストの斎藤忠氏は「纏向遺跡は大和王権の中心で、列島各地の土器が、集まってきているが、九州の土器だけは欠



方格規矩鏡 高方作雲文鏡四神鏡・径16.1cm
福岡県前原市大字有田平原、平原遺跡から、4面の同型鏡（直径が一致）が出土。柳田康雄氏は、国内産の鏡であるとする（原田大六著『平原弥生古墳』葦書房刊による）。



		弥生時代 鉄鏃
九州	福岡	398
	佐賀	58
	大分	241
	長崎	29
	宮崎	100
	熊本	339
	鹿児島	3
	小計	1168
中国		356
四国		118
近畿	兵庫	92
	大阪	40
	京都	112
	奈良	4
	滋賀	13
	和歌山	5
	三重	3
	小計	269
中部		131
関東		132
東北		1
合計		2175

邪馬台国はどこか？ 日本神話の高天原こそ邪馬台国の場所を特定する最大のキーワードだ。その高天原は、福岡県の朝倉地方と考えているが、現在の日本では邪馬台国の時代には、すでに畿内では纏向古墳群などの時代になっていたのであり、「邪馬台国九州説」や「邪馬台国東遷説」は成り立たないとする論調が多く見られるようになっている。

その最大の根拠が土器編年と、それにともなう木材の年輪年代測定法、さらには炭素14による時代設定である。しかし、弥生末から古墳時代の区切りとなるとさる「庄内式土器」といわれるふしぎな土器がある。この問題を整理すれば、邪馬台国も見えてくると思う。

◆庄内式土器とは

昭和39年、弥生時代と古墳時代に移り変わる時代に使われた土器として、田中啄氏によって、それまで古墳時代の最初の土器である布留式に先行する土器群として「庄内式土器」の存在が初めて報告された。戦前の発掘で大阪府豊中市の庄内遺跡（小学校敷地）の土器の分析から、布留式より遡る最古の土師器としてとらえたものだ。



1. 今川遺跡
2. 久原瀧下遺跡
3. 御床松原遺跡
4. 三雲遺跡
5. 西新町遺跡
6. 多々良込田遺跡
7. 那珂深ヲサ遺跡、瑞穂遺跡、板付周辺遺跡
8. 柏田遺跡
9. 井手ノ原遺跡、今光遺跡
10. 小田遺跡、神蔵古墳（下層）
11. 塚堂遺跡
12. 西一本杉遺跡
13. 西原遺跡、本川原遺跡
14. 千塔山遺跡
15. 赤塚古墳周濠
16. 安国寺遺跡
17. 守岡遺跡

地図14 北部九州の庄内系土器出土主要遺跡
（榎原考古学研究所図録）

も庄内式土器の年代を3世紀の終わりとする学者もいる。年代論はまだフレキシブルである。おとぎ話に近いギリシャ神話を信じたシュリーマンによってトロイやミケーネは発見された。

◆伝承と記紀の記述をもとに神功皇后や景行天皇の事績を追究している河村哲夫氏は、著書のあとがきの中で「邪馬台国の卑弥呼の時代は神功皇后や景行天皇の時代からいえば、せいぜい一世紀半程度前の時代である。神功皇后・景行天皇の伝承地や地方豪族の所在地を地図上にプロットしていくと、かなりの確率で邪馬台国時代の九州の勢力図と重なるはずである。神功皇后・景行天皇を通して邪馬台国に迫ることも可能だろう」と述べている。期待したい。

表6 北九州と近畿の土器編年
(関川尚功氏などの見解を参考とした『季刊邪馬台国』編集部案)

年代	時代	北九州編年		近畿編年	
		時期	土器様式	時期	土器様式
400	縄文時代	晩期後半	夜白式 { 1 2 板付Ⅰ式 3	晩期後半	船橋式
300					長原式
200		前期	板付Ⅱ式 { 4 5	前期	第Ⅰ様式 { 1 2 3 4
100					
B.C.		中期	城ノ越式 1 須玖式 { 2 3 4 5	中期	第Ⅱ様式 { 1 2 3 第Ⅲ様式 { 1 2 第Ⅳ様式 { 1 2 3 4
0					
A.D.					
100		後期	高三瀬式 1 2 3 4 下大隈式	後期	第Ⅴ様式 { 0 1 2 3
200					
300		移行期	西新式 5 庄内式 { Ⅰa Ⅰb Ⅱa Ⅱb Ⅲa	移行期	第Ⅵ様式 { 1 2 遷向1式 遷向2式 遷向3式 遷向3式 (新) 遷向4式 遷向5式
400					
	古墳時代	前期	土師器	前期	布留式

表8 近畿の土器編年
(寺沢薫氏による)

年代	近畿編年		
	時代	時期	土器様式
400	縄文時代	晩期後半	船橋式
前4世紀			長原式
300	前3世紀	前期	第Ⅰ様式 { 1 2 3 4
200			第Ⅱ様式 { 1 2 3 4
前2世紀	弥生時代	中期	第Ⅲ様式 { 1 2
100			第Ⅳ様式 { 1 2 3 4
B.C. 0		後期	第Ⅴ様式 { 0 1 2 3
A.D. 0			第Ⅵ様式 { 1 2 3
100	古墳時代	前期	庄内式 { Ⅰa Ⅰb Ⅱa Ⅱb Ⅲa
200			布留式 { Ⅰa Ⅰb Ⅱa Ⅱb Ⅲa
300			須恵器

(寺沢薫著『王権誕生』〔日本の歴史02、講談社刊〕による。)

表7 北九州の土器編年
(柳田康雄氏による)

年代	北九州編年		
	時代	時期	土器様式
400	縄文時代	晩期	夜白式 { 1 2 3
300			板付Ⅰ式 3 板付Ⅱ式 { 4 5
200	弥生時代	前期	城ノ越式 1
100			須玖式 { 2 3 4 5
B.C. 0		中期	高三瀬式 1 2 3 4
A.D. 0			下大隈式 5
100	古墳時代	前期	西新式 { Ⅰa Ⅰb Ⅱa Ⅱb Ⅲa
200			土師器
300			須恵器

(森浩一編『前方後円墳の世紀』〔日本の古代5、中央公論社刊〕による。)